

自分の目的を持って、自分で学びをつくる。 2教科同時進行の授業で、クラス全員の個が輝く

東京都 渋谷区立広尾小学校

「個別最適な学び」に重点を置いて研究を進めている渋谷区立広尾小学校。2023年度、4年生では、学習者が自分で課題や進度を決めて学ぶ「自由進度学習」を、国語と社会で同時に行う形で取り入れた。子ども個々の学ぶ姿をイメージしながら単元計画を練り、様々な学習材を用意。学習の流れを掲示するなどの学習環境を整えたところ、子どもは集中して自分で学びを進めている。学習が苦手とされていた子どもも休み時間に課題に取り組むなど、意欲的に学ぶ姿が見られる。



◎教育目標は、「ともに学び ともに生きる 広尾の子を育てる。やさしく かしく たくましく」。企業等の出前授業や各国の大使館との交流、幼稚園・中学校・高校・大学と連携した活動などに積極的に取り組む。関東大震災後の震災復興事業の末期に建設された校舎は、国の登録有形文化財（建造物）。

開校 1916 (大正5) 年
校長 木田義仁先生
児童数 245 人
教員数 20 人
学級数 11 学級

学びに楽しさを見いだすため、 「自由進度学習」を取り入れる

「未来の学校ビジョン」の1つに「新たな学びの実現」掲げる渋谷区立広尾小学校は、朝会での6年生のスピーチ*1や、子どもが運営する行事「広尾ランド」*2など、子ども主体の活動に力を入れている。そうした学校文化を踏まえ、研究主任の進藤大介先生は一部の授業に自由進度学習を取り入れている。赴任した2022年度に担任をした6年生が、一人ひとりの能力が高く、個性豊かであるにもかかわらず、学校で学んだり、集団で過ごしたりすることの楽しさを見いだせずにいたことがきっかけだった。

「授業づくりを研究する中で自由進度学習を知り、早速実践しました。学習形態を少しずつ変え、最終的には授業の進め方を子どもと一緒に考え、子どもが各教科を担当して自ら授業を進行する方法にしたのです。すると、子どもは自分たちがやりたい学びを選べる授業に面白さを感じ、互いのよさを発揮しながら意欲的に

学ぶようになりました」(進藤先生)

2023年度に担任となった4年生のクラスでも、一人ひとりに合った学びができるように自由進度学習を行おうと考えた進藤先生は、外部の勉強会で研究を重ね、7月に算数で、9～10月には国語と社会の2教科同時で自由進度学習を実践した。

「自由進度学習と言っても、子どもにただ学びを任せるわけではありません。一斉授業や学級経営を行う中で個々の子どもの特性を見取り、私がそれを踏まえた授業づくりがイメージできるようになってから、自由進度学習を取り入れました」(進藤先生)

2教科同時進行で、 子どもが学びを調整できる

進藤先生が行った国語と社会の2教科同時の自由進度学習を取り入れた授業を見ていく。国語は和紙を題材にした単元の全9時間、社会は伝統工芸を題材にした単元の全8時間、合計17時間だ。毎日1～2時間がこの授業となり、子どもは2教科どちらにも



主任教諭、研究主任

進藤大介

しんどう・だいすけ
同校に赴任して2年目。
4年生担任。

取り組める。そうすることで、「個別最適な学び」により近づくと考えた。

「1教科では、その教科を苦手とする子どもが1人で学び続ける苦しさを感じ、また、一人ひとりの興味・関心に応じた学習を展開しづらいと思いました。2教科にすれば、自分で調整して両教科を行き来しながら学べるので、『学習の個性化』につながると思いました」(進藤先生)

さらに進藤先生には、今回の単元で大きなねらいがあった。

「子どもの中には、『分からない』『無理』と言い、すぐ他者に頼る姿勢が見られました。自分で学びを選んで進める経験を通じて、学びを自分事と捉え、面白さを感じられるようにすることで、自分で学習に取り組む力を育てたいと思いました。そこで、子どもが1人で17時間、学び通せる

*1 よきリーダーを育てることをねらいとして、全校朝会で毎回6年生が1人ずつ、自分の興味のあることや将来の夢などを発表する。 *2 学年縦割りで組んだ各班が、1～6年生全員が楽しめるように店や出し物を計画して、楽しく遊ぶイベント。

ように単元計画を考え、また、空き教室を本単元の専用教室にして、学習環境を整えました」(進藤先生)

「学習のてびき」で見通しを持ち、シートやカードで課題を進める

国語と社会の単元計画は次の通り。

●国語の単元計画(図1)

国語は、和紙を題材とした教科書の単元を基に、「ペルー大使館の方々に日本の魅力を伝える紹介文を書く」という課題を設定した。今年7月、学校の近隣にあるペルー大使館から大使が来校して4年生と交流し、そのお礼として11月にペルー大使館を訪問する予定となっていた。そうした背景から、子どもが紹介文を書く課題に自分事として取り組めるのではないかと、進藤先生は考えた。

そして、子どもが学習の見通しを持てるよう、学習の流れを記載した「学習のてびき」と、書き方のポイントを自己チェックできる「書き方チェックシート」を配布(図1)。完成イメージを伝えるため、紹介文のよい例と悪い例も示した。よい例は、自分の力に合った書き表し方が選べるように2パターンを用意した。また、専用教室には、学習の流れや紹介文の見本などを模造紙に印刷して掲示(写真1)。図書室から借りた日本の文化や社会に関する書籍などを並べた。

●社会の単元計画(図2)

社会は、「東京都の伝統工芸品を調べ、人々が協力して産業の発展に努めていることを理解する」という課題を設定。題材は、「江戸切子」「江戸木目込人形」「東京琴」「本場黄八丈」「江戸てがま提灯」の5つから、子どもが各自、興味のあるものを選ぶこととした。

国語と同様に、学習の流れを記載した「学習のてびき」を配布。加えて、伝統工芸品ごとに「学習カード」を

図1 4年生 国語「ペルー大使館の方々に日本のみりよくを伝えよう」(全9時間)

※広尾小学校の提供資料を基に編集部で作成。

図2 4年生 社会「東京都の特色ある地域の様子を調べよう」(全8時間)

※広尾小学校の提供資料を基に編集部で作成。

用意し、5つの学習活動と活動時の着眼点などを記し、5つめの学習活動は「『東京都では、どのようにして伝統工芸を守り、発展させようとしているのか』に対する答えを、自分の言葉でまとめる」とした。

学習材は、進藤先生が5つの伝統工芸品のそれぞれの職人に行ったイン



写真1 学習の流れなどはいつでも参照できるよう、専用教室の壁に掲示。読み書きが苦手な子どものために、ふりがなをつけた資料も用意した。



写真2 各伝統工芸品の協会や職人の協力を得て、5品目すべての実物を用意。子どもは黄八丈の着物を着たり、琴を弾いたりして、本物に触れた。

タビューをまとめた資料や関連動画、伝統工芸品のパンフレット、実物などを用意した（写真2）。

どの子が何をを使うか、学ぶ姿をイメージして学習材を練り直す

当初の単元計画は、社会で伝統工芸品について調べ、国語でその紹介文を書くという構成を考えていた。しかし、詳細を練るうちに、紹介文を書くためには社会で先に調べ学習をする必要があり、そうすると学びの自由度が半減し、2教科同時進行の自由進度学習を行うメリットが十分に得られないことに気づいた。

そこで改めて学習指導要領に立ち返り、本単元で子どもに身につけてほしい力を設定。国語では「相手や目的を意識して、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係が分かるように書き表し方を工夫して相手が納得する文章を書けること」、社会では「特色ある地域では、人々がどのように協力してまちづくりや産業を発展させてきたのかを理解すること」とし、それらを踏まえて単元計画を練り直し、前述の形にした。

授業の準備段階で学習材を見直したところ、教員の支援がなければ学びを進められない子どもがいそうなことに気づいた。そこで、一人ひとりの子どもをイメージし、その子どもが個別学習をするためには何が必要かを考えて学習材を練り直した。例え

ば読むことが苦手な子どもを想定し、進藤先生が職人にインタビューした内容をまとめた資料を用意したほか、インターネットで伝統工芸品に関する動画を探してクラウドに上げた。

「社会の題材とした伝統工芸品の5品目は、東京の伝統工芸品42品目から選びました。私自身が事前に調べ、子どもが書籍やインターネットで調べた際に学習が成り立たないと思ったものは外すなど、目的に合ったものを選びました」（進藤先生）

自分で取り組む順序を決め、学びに打ち込む子どもたち

単元の最初の2時間は、国語と社会のガイダンスを1時間ずつ行い、子どもに「学習のてびき」を配布し、学習の目標や学習の流れを説明した。

「例えば国語のガイダンスでは、私が作成した2種類の紹介文を比較し、子どもがよい点と悪い点に気づき、何ができるようになればよいのかをイメージできるようにしました。加えて、今回の単元では基本的に1人で取り組み、自分で学ぶ力をつけてほしいという思いも伝えました」（進藤先生）

そうして、子どもが学びの目的意識を持てるようにした上で、3時間目は各自で学習計画を立て、4時間目から自由進度学習を開始した。

「いつもは活発な子どもが1人で学びに打ち込む姿や、休み時間も本活動に取り組む子どもの姿が見られました。家のパソコンで調べてきた子どもや、家にあった伝統工芸品をみんなに見てほしいと持ってきた子どももいました」（進藤先生）

5時間目の授業も、子どもは専用教室や、専用教室の前にある図書室、オープンスペースなどに集まり、思い思いの場所で学び始めた（授業レポート）。図書室の本で調べた「さっ

ぼろ雪まつり」に関する情報を整理して構成を練ったり（国語）、本場黄八丈の制作工程を動画を見て、分かったことを書き出したり（社会）と、それぞれ自分で学びを進めた。この1時間で国語と社会の両方に取り組んだ子どもは、「（国語の）紹介文のテーマを浮世絵にして、まず本で調べてみました。それから（社会の）本場黄八丈の調べ学習をしました。見学ができる工房があったので、今度行ってみたいです」と、楽しそうに話した。

進藤先生は子どもの様子を見て回り、後の授業づくりに生かすため、個々の学習進度や使用している学習材、つまづいている点などを書き留めた。その間、進藤先生は子どもに声はかけず、また、子どもも進藤先生に質問することはなかった。

「子どもが私に話しかけてきた内容はどれも、『インターネットには書いていなかったけれど、パンフレットを見たら分かった』などの発見や驚きでした。自分で探した情報が学びにつながった時の面白さ、楽しさが、私に伝わってきました」（進藤先生）

子どもが気づくよう、見守ることが教員の役割

子どもが自分で学びを進める姿を見て、進藤先生は次のように語った。

「一斉授業では学びにつまずきが見られた子どもが、自分で動画を見たり、資料で調べたりして課題に向かう姿に、学びそのものが持つ魅力と、一人ひとりが持つ『学ぶ力』の高さを改めて感じました。学びの見通しを持ち、必要な学習材が整っていれば、自分で学びを進められるようです。自分で選んだ題材だから自分事として主体的になれるのだと実感しました」

学びが停滞している子どももいたが、進藤先生はあえて声をかけなかった。

授業レポート

4年生 国語・社会 2教科同時進行の自由進度学習 全17時間の5時間目

本時のめあては、国語と社会のそれぞれの学習活動から子どもが各自で選択

1 自由進度学習



図書室の前の空き教室に専用の学習環境を整備。毎時間、この教室を中心に学びに取り組む。本時も授業開始とともに子どもが集まり、すぐに学び始めた。



図書室では、広い机にプリントや書籍を広げて学んだ。さらに情報を集めようと、司書教諭に「風神と雷神の本はありますか」と相談する子どももいた。



国語の紹介文に取り組んでいた子どもは、自分が選んだテーマの歴史や詳しい内容など、動画や本で得た情報を付せん紙に書き、整理していた。

45 分間



進藤先生が伝統工芸品の職人に行ったインタビュー内容をまとめた記事を撮影する子ども。タブレット端末のデータが開けない時にも、臨機応変に学んでいた。



学習材は、学校や地域の図書室から借りた題材に関連する書籍や、進藤先生が集めた伝統工芸品のパンフレットなど、様々なものを用意。何をどう活用して学ぶのかは、それぞれが考えた。



授業の終盤に、一緒に江戸木目込人形について調べていた2人。その起源がウェブサイトによって違う内容であることに気づき、何が正しいのか、自然と2人で話し合いながら調べていた。

「本人の普段の様子から、『これではいけない』と自分で気づき、学びを調整するだろうと推測しています。今後学びが深まると、つまずいたり、悩んだりする子どもが出てくると思います。本時でも、調べた内容を紹介する伝統工芸品の動画を作成していた子どもが、話す内容が少ないことに気づき、どうしようか考え込んでいました。周りの子どもが『CMだから短くてもいいんじゃない?』と言い、私が『どうするの?』と聞くと、『もう少し調べる』と答えまし

た。その子どもは調べ学習が不十分だったといずれ気づくだろうと思いましたが、私は思わず問いかけてしまいました。見守りに徹することの難しさを実感しました」

学びが深まると、友だちの考えを聞きたくなる場面が出てくる。そうした「協働的な学び」がよりよい形で行われるための方法も検討中だ。例えば、どんな紹介文を書いているのか、どの伝統工芸品を選び、何を調べたのかなど、友だちの学習内容を見ることができるとき、協働学習ソフト

を活用して設けることも考えている。

本単元の授業は、同校の複数の教員が見学した。研究主任として進藤先生は、目の前の子どものに合った「個別最適な学び」を目指していきよう、研修を行っていく予定だ。

「私はこのクラスには自由進度学習が合っていると考えて実施しましたが、『個別最適な学び』を充実させる方法はほかにもあると思います。1つの方法にこだわらずに授業研究を重ねて、子どもが自ら学ぶ授業づくりを進めていきます」(進藤先生)